

株式会社さくら都市総合研究所

主席 清水 秀幸
研究員

11 近代代表参道の歴史とその変遷

今や、ばていとお大門蔵楽庭(くらにわ)は、多くの旅グルメの雑誌をはじめとする各メディアによる紹介もあり、全国的知名度を冠しており、翌2006年には、中小企業庁の「がんばる商店街77選」にも選定され、地域活性化策の成功例として、各地からの視察者も多い。

筆者も職場からさほど遠くない由縁から、時折当地に立ち寄りランチを楽しむ。静寂の佇(たたずま)いの中庭(パティオ)に腰をおろし、ひいきの店で昼食をいただくわけだが、その時いつも感じ

るのは、成功事例として紹介される賑わいと静寂な空間との隔たりである。いや、むしろその空間には厳かささえ感じるのである。

筆者がそこを訪れるのは、きまつて平日の昼時であるが、その時のパティオは、いつも判で押したように1時間余りで50程度の来訪者である。寒い日や雨天の日などは20程度といったところか。

これはあくまで、筆者の目視によるものであるが、そのうちおしやれな店内に足を運び入れる来訪者は、2割から3割程度の人々である。それ以外の過半数の人々は、緩やかな坂の小路を散策したり、木影で記念写真を撮ったり、時に店頭にあるランチメニューを

見て立ち去る人々である。

彼らの滞在時間はせいぜい長くても10分程度。筆者行きつけの店の店主に聞くと、パティオを楽しむ散策者はそこそこいるものの、そこで食事を楽しむ人は数組程度ではないか、との答えが返ってきた。

確かに、「ばていお大門蔵楽庭」という商標ブランドは既に確立し、注目もされている。しかしながら、ブランドの確立がイコール「地域の再生」に直結した成功例とは限らない。

筆者が何度も繰り返す、造形(ハード)に、人の心(ソフト)が宿らない限り、地域の再生は完結しないのである。

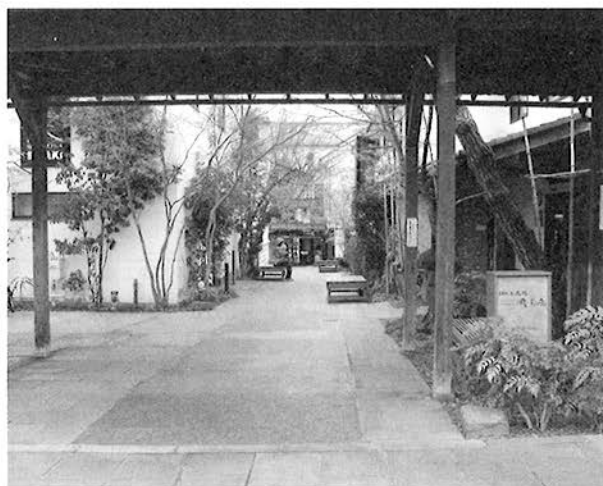
したがって、ばていお大門においては、中心市街地における中心的役割である、市民と来街者との交流を促す演出に不可欠な、迎える側の心の仕掛けがまだ途上にあり、ハードな側面ばかりが取り上げられているにすぎないのではないだろうか。

パティオを訪れる人々を横目で見て、素通りする店のスタッフが、見知らぬ来訪者にも「こんにちは」と声をかけるだけで、そこを訪れた人々がどれほど和むのか、をもっと知るべきではないだろうか。

来訪者をもてなそうとする心が欠けたまま、商店街の見た目だけを時流に合わせたレトロ化で装ってみても、賑わいを作り出すことはできない。観光客が主目的の地を訪れたついでに、散策がてら立ち寄る程度の場所という評価ではつまらないと筆者は考えるのである。

(続く)

清水 秀幸氏(しみず・ひでゆき) 1952年長野市生まれ、76年明治大学政経学部政治学科卒。2013年6月株式会社守谷商会役員を退任し、同年7月株式会社さくら都市総合研究所を設立。長野市都市計画審議会専門委員ほか3委員、その他各地方自治体の審議員・部会員を兼任。現在同研究所社長



静かなたたずまいをみせる中庭(パティオ)